

あとがき

「まだ終わらない」を終わらせていくために

2011年3月11日の東日本大震災と、その直後の東京電力福島第一原子力発電所事故から11年が過ぎました。その後の復興は、新しい街づくりや巨大な防波堤に代表される防災工事という形の上では進んできました。しかし、私が現在住んでいる宮城県の海沿いを歩くと、かつて人々が生活していた土地が広大な更地のままになっているところが目につきます。そして福島県の浜通り地方を常磐自動車道で南下すると、山に沿った道路脇の線量計にはまだ高い線量が示されますし、何よりも人がいなくなった街の風景に胸が痛くなります。美しい自然の中で人情こまやかな人びとが住む東北の地が、かつての姿を取り戻すにはどうしたらいいのだろうか、と思わない日はありません。その中で懸念されるのは、放射線やがんに関して科学を無視した言説が未だに残り続けていることです。

地域コミュニティの再建にどう取り組むのか、あるいは一筋縄ではいかない廃炉作業といった、真に人智を集めて取り組まなければならない問題の解決は、長い時間をかけて一歩ずつ進めていくことでしか、終わりは見えてこないでしょう。しかし、この本で扱っている甲状腺がんの問題やトリチウムを含む廃炉処理水の問題は、科学にもとづいた議論によって解決を図れるものです。しばしばメディア等で懸念が表明される風評被害の問題も、その延長上に社会科学的な知見をもって取り組むべきものです。これらは早急に終わらせていくことが可能なはずで

一方、そうこうしているうちに世界は、終わりの見えない疫病の時代—もはやひとつの時代といってもいいでしょう—を迎えてしまいました。

2019年暮れに新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行が中国で始まり、わずかな日にちのうちに世界的なパンデミックとなったとき、我が国でもパニック状態が起きました。それでも、この流行は半年か1年もたてば収まっているのではないかという漠然とした期待を持っていた人は多かったのではないのでしょうか。その期待に反して、パンデミックの発生から正月を3回も超えて2022年にまで疫病が世界に蔓延したままであるなどということは、多くの人にとってまったく予想もできないことだったのではないのでしょうか。流行がそろそろ収束するかと、期待をこめて先を展望した矢先に、また新しいウイルスが登場しては、希望が打ち砕かれてきました。世界の国々の格差が医療の格差となり、パンデミックが収まるにはあと何年も掛かるだろうという予測もなされています。

人々にとって未だ経験のない状況は不安をかき立てるものです。そして不安は人の理性を狂わせます。混乱の中で利己的な欲望をふくらませる人たちも出てきます。大災害や社会混乱の中で差別や偏見が増幅され、時に暴発してしまったことも歴史に記されています。私たちが今経験しているパンデミックの中でも、陰謀論や反ワクチンのデマが振りまかれ、火事場泥棒的な悪徳商法がはびこる状況が出現してしまいました。

科学的であるはずの、そして科学的でなければならない問題のあれこれにおいて、さまざまの立場の人が議論を深めながら共通の課題に立ち向かうのではなく、極論をもって対立

を作り出して煽っている人々の残念な光景を目にします。善意から来たはずの行動が無知ゆえに不毛に帰することも、あまりにしばしば起きています。

ともすれば混乱してしまいそうな状況の中では、本質的なむつかしさと、合理的に対処すれば解決の方策を見いだせる課題とを、時にそれらは絡み合っているにせよ、切り分けて行く力を持ちたいものです。終わらせられるものは終わらせていきたいのです。そのためにどう考え、どう振る舞ったらよいのかを、専門の異なる著者のそれぞれの立場から自由に、もちろん知的誠実さをもって論じてもらいました。読者のみなさんにとっても考えのヒントになれば幸いです。

(小波 秀雄)